〈新刊紹介〉

吉田常吉著

# 『幕末 乱世の群像』

小泉雅弘

本書は、『井伊直弼』（吉川弘文館、一九六三年）、『唐人お吉』（中央公論社、一九六六年）、『安政の大獄』（吉川弘文館、一九九一年）などの著者として知られる故吉田常吉先生の旧稿を、人物を中心に再編成して刊行したものである。

本書の構成は次のとおりである。

序　幕末という時代
1　天保の改革
2　迫られた開国
3　尊皇攘夷の潮流
4　はね返る長州
5　最後の将軍
I　井伊直弼と安政の大獄
一　井伊直弼とその時代
1　直弼の生い立ち
2　開国をめぐって
3　将軍継嗣問題と安政の大獄
二　長野主膳と村山たか
II　乱世のなかの女性たち
一　唐人お吉
1　〝唐人お吉〟の生まれる風土
2　開かれた下田の港
3　星条旗のひるがえる玉泉寺
4　唐人お吉
5　つくられた悲恋物語
二　唐人お林
1　外国側史料の欠如
2　家僕のつたえる善福寺の侍妾
3　善福寺侍妾の新史料
4　公使と閣老の対談
5　〝唐人お林〟の誕生
6　ヒュースケン死後のハリスの心境
7　支度金二十五両の意味するもの
8　お伽の女性
三　岩亀楼喜遊
1　ふるあめりかに袖はぬらさじ
2　港崎遊廓岩亀楼
3　幻の遊女
四　幾松
1　酔うては枕す、美人の膝
2　桂小五郎との出会い
3　京都を脱出、対馬から桂のもとに

Ⅲ　暗殺の謎と真実
一　水戸斉昭暗殺説
1　はじめに
2　老公暗殺説の根拠
3　記録に見える老公の最後
4　彦根藩探索方の情報
5　疑問とする暗殺説
6　おわりに
二　孝明天皇毒殺説
1　てんやわんやの時代
2　天皇は御疱瘡でなくなられたという説
3　御毒殺の噂の発生
4　急進派のデマか
5　デマの温床
6　天皇も疱瘡にかかられる可能性がある
7　むすび
三　将軍家茂の死
Ⅳ　倒幕から維新へ
一　坂本龍馬と長州征討
二　小栗上野介と戊辰戦争
1　小栗上野介忠順の日記
2　幕末史への登場
3　大政奉還と忠順
4　鳥羽・伏見の役と忠順
5　知行所土着の準備
6　江戸から権田村へ
7　博徒の来襲
8　観音山の開発と屋敷の普請
9　三藩使者との談判
10　忠順の最後
三　西郷隆盛と明治維新
1　西郷隆盛とその周辺
2　征韓論の勃発と廟堂の動揺
3　西郷の帰郷と私学校の設立
4　西南戦争を推進させた人々
5　西郷隆盛の人物
解説　――あとがきにかえて――　南　和男

以下、本書の内容を簡単に紹介しよう。

序章の「幕末という時代」は、本書の導入部分として天保の改革から江戸開城までの概説である。初出の掲載雑誌の性格から、一般の読者にもわかりやすい記述となっており、次章以降のいわば各論の理解を深めるためにも、良き導きとなろう。

「Ⅰ　井伊直弼と安政の大獄」は、吉田先生の前掲著書が凝縮された内容となっている。

「一　井伊直弼とその時代」では、部屋住の時代を経て藩主になり、幕政にあっては水戸斉昭との対立などさまざまな政治課題に対処した井伊直弼の生涯を描きだした。また、将軍継嗣問題では直弼の腹心長野主膳が紀州藩と関係の深かったことに注目している。さらに「二　長野主膳と村山たか」では、主膳とたか、といった直弼

をめぐる人物像を三人の心性をからめて描写している。前掲著書を含め本章の叙述は、東大史料編纂所で井伊家史料の編さんに携わり、井伊直弼関係史料を博捜してきた先生のまさに真髄といっていい。

好事家的な問題関心ではなく、史料に徹して歴史事象を明らかにしたのが、「Ⅱ　乱世のなかの女性たち」である。ここでは有名な唐人お吉のほかに幾松、そして唐人お林、喜遊というあまり知られていない人物を取り上げている。お林はお吉と同様にハリスの傍妾とされる女性、岩亀楼の喜遊は、異人に肌を許すのを潔しとせず自害したと噂された遊女であった。幾松は京都の芸妓で、のちに木戸孝允（桂小五郎）と結ばれた松子夫人。「酔うては枕す、美人の膝。醒めては談ず、天下の権」とは、明日の命の保証もない志士たちが好んで口にした言葉であり、その前半が項目の1に題されている。こうした本章の底流に共通しているのは、動乱の時代を背景として生きた女性の姿を、幕末の政治動向や社会状況のなかで位置づけ、描き出すという手法である。喜遊については、その自害の物語を、儒者大橋訥庵一派の尊攘派志士による仮作とみなした。読後に、我々のもつ幕末の歴史像がより豊かになることは間違いない。

「Ⅲ　暗殺の謎と真実」は、水戸斉昭・孝明天皇・徳川家茂それぞれの暗殺説を検証したものである。彼らが政局を左右する人物であっただけにその死因については暗殺説が流布したが、本章ではいずれもそれを否定している。

「一　水戸斉昭暗殺説」では、水戸の城下に入り込んでいた彦根藩探索方の情報を紹介しており、このような諸藩による情報収集・諜報活動の実態については不明な点が多いので参考になろう。本書に収められた最も初期の論考が「二　孝明天皇毒殺説」（原題「孝明天皇崩御をめぐっての疑惑」『日本歴史』第一六号、一九四九年）であり、この孝明天皇の毒殺説については、その後も研究者の注目を集めた。すなわち、石井孝氏の『幕末　非運の人びと』（有隣堂、一九七九年）と原口清氏「孝明天皇の死因について」（『明治維新史学会報』一五、一九八九年）である。石井氏は毒殺説を主張し、原口氏はそれを否定したが、いずれにせよ幕末史の重要な問題であることに違いはなく、本書に収められた論考はまさに「今日でもなおその価値を失わない」（解説より）のである。本章では直接言及していなくとも、風聞などの情報の発生と流布といった情報伝達の問題、たとえ偽の情報であれ現実の政治状況や社会状況に及ぼす影響・作用とその分析など、我々が方法論として学び取るべきことは多い。

「Ⅳ　倒幕から維新へ」では、異なる立場で幕末維新史の重要な局面を演じた坂本龍馬、小栗上野介忠順、そして最後に西郷隆盛を取りあげている。

「一　坂本龍馬と長州征討」は未発表の坂本龍馬の書簡を全文紹介し、その年号を慶応元年に比定するとともに、緻密な史料の読み込みによって「七月七日」の記載を「九月七日」の誤記と断定した。「二　小栗上野介と戊辰戦争」は主に慶応三年一〇月の大政奉還から翌四年閏四月に斬首されるまでの内容だが、小栗は幕府の中枢に位置していただけに、末期の徳川権力を考えるうえで避けて通れない人物である。本書収録以外に小栗に関しては「小栗上野介日記について」（『人間創造』創刊号、一九六六年）などがあり、かつて大学の授業で小栗忠順の日記を講読したという（『吉田常吉先生の足跡』故吉田常吉先生を偲ぶ会、一九九四年）。序章が天保期から明治元年までの叙述であるのに対して、本章の「三　西郷隆盛と明治

維新」は、明治元年から同一〇年までを範囲としており、幕末維新史の俯瞰的流れが理解できるようになっている。ここでは、西郷に関する記述が中心とはいえ、戊辰戦争後の薩摩藩藩政改革、明治四年の上京と参議就任、征韓論による下野、そして西南戦争に至る過程を、微妙な島津久光との関係、あるいは西郷をとりまく人物像にも迫りながら丹念にあとづけている。

人物を研究テーマとして取り扱う場合、その叙述が意識・無意識とにかかわらず研究者の主観に左右されることがある。しかし本書で描き出された人物像の背景には、徹底した史料の読み込みがあり、そのためきわめて説得的である。

なお、本書の最後に南和男先生による適切な解説が収録されている。

吉田常吉先生が永眠されたのは一九九三年三月一九日であった。享年八三才。その一か月前まで「東久世通禧日録」を執筆（未刊）していたという。告別式の参列者の中には、全国から駆けつけた多くの教え子の姿があった。実証主義に徹した堅実な学風と、大正デモクラシー期に成長されモダンな雰囲気を身につけていた先生は、思えば歴史の中の人間というものの存在や生き方を、常に考えていたのかもしれない。その意味で本書は、「一期一会」を座右の銘とされた吉田先生にふさわしい内容といえる。

（吉川弘文館、一九九六年一月刊、二八二頁、定価二八八四円）

## 【駒沢史学会一九九五年度大会・総会】

本会の一九九五（平成七）年度の大会・総会が左記の要領で開催された。

会　期　一九九五年六月一〇日（土）

［総　会］　一一時より　於第一研究館一階会議室

［研究発表］　一三時より　於第二研究館一〇一教場

日本における石窟形式磨崖仏について　田島禎章　氏

『香蔵院珎祐記録』に見る鶴岡の供僧たち　伊藤恭子　氏

後北条氏の領国支配――下野国小山領を中心に――　塚田雅信　氏

近世の公家日記に関する一考察　持丸秀樹　氏

農地改革研究の方法と問題点　田中　淳　氏

［記念講演］　一六時より　於一号館四〇一教場

戦後五〇年、戦前五〇年の日朝関係　明治大学教授　海野福寿　氏

［懇親会］　一八時より　会場「ロマン」（駒沢大学正門前）

本大会は日本史関係五本の研究発表があり、活発な質疑応答がなされた。しかしながら、なかなか報告希望者が集まらず、報告者の中には急遽の発表をお願いした方も多い。時間の限られた中、研究発表をして下さった方には感謝申し上げたい。また、次回は日本史に止まらない分野で、かつ幅広い層の発表者が集まることを期待したい。会員各位の積極的な参加をお願いするものである。

記念講演は海野福寿先生にお願いした。本年は戦後五十年に当たり、折しも数日前に当該問題に対する、無認識な国会議員の暴言があったこともあり、非常にタイムリーな講演であった。ご多忙の中、